≪2014 年 12 月 お宝映像上映会兼忘年会報告≫

【日　時】2014 年 12 月 28 日（日）　19：00～21：00（この時間は飲み放題。前後は各自）
【会　場】フットボールサロン 4-4-2　　墨田区江東橋 4-16-5 SK ビル B1
【参加者（会員・メンバー）12 名】
安藤裕一（筑波大ハンドボール部 OB）、牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）、大河原誠二（筑波大附属高 OB）、奥崎覚（(株)コリー）、奥山純一（プログラマー）、春日大樹（筑波大学蹴球部 OB）、金子正彦（会社員）、岸卓巨（中央大学大学院）、小池正通（(株)La Esperanza）、小池靖（サッカー少年団コーチ）、齊藤宣彰（(有)JLA ASIA）、高平豊明（サッカー文化フォーラム）、田中俊也（三日市整形外科）、徳田仁（（株）セリエ）、中塚義実（筑波大学附属高校）、松下徹（サロンアドバイザー）
【参加者（未会員）3 名】石川淳一（フットサル・サッカー観戦してます）、国島栄市（会社員）、中須賀希（筑波大附属高 OG）
注）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません（ご本人の了解が得られた範囲で公開しています）

＜時程と概要＞

18：00 ごろ　…　アップ開始
19：00　…　正式な乾杯ー「今年 1 年のごくろうさまと、賀川浩さんの受賞を祝して！」
　　お宝映像のうんちく（中塚＆牛木）→上映

・この映像は中塚が学生時代（筑波時代）、上京した際に渋谷のビデオ屋で発見して購入したもの。昔から見ておきたかったゲームだったので、入手した時は本当にうれしかった。
・牛木さんからは時代背景の話があった。東西冷戦時代、オリンピックがアマチュアリズムを掲げていた時代のことである。
・西ドイツの魅力的なサッカーが冴える。前半は 1-0。最後尾のベッケンバウアー、中盤のネッツァー、最前線のゲルト・ミュラーは「動いている」だけでうれしい。GK マイヤー、DF がヘッティゲス、ベッケンバウアー、シュバルツェンベック、ブライトナー、MF ネッツァー、ビンマー、ヘーネス、FW ハインケス、ミュラー、クレマース。夢のようなイレブン。ソ連の選手名からは、いろんな共和国の連合軍であることが感じられる。

20：00 ごろ　…　ハーフタイム　＝　参加者自己紹介
・2014 年を振り返って＆2015 年の抱負を順に語る
・語りたい人が挙手、または話をした人が次の人を指名。
・後半終了後に続きの自己紹介を行うが、後半終了時にはわからなくなっている可能性がある方は、前半終了時がおすすめ。春日氏に始まり、田中氏まで。約半数が語った

20：40 ごろ　…　後半開始
・後半も西ドイツの華麗なサッカー。しかし人々の視線は少しずつ画面からワインに向かっていく。と思いきや、静岡からやってきて疲れている T さんのまぶたが重なってきた（facebook には「試合

は 1-0 でしたか？」との投稿あり。いや、3-0 ですよ）。
・3-0 で終了後、1972 年の決勝会場のお客さんが猛烈な勢いでピッチになだれ込んできた。そう言えばこのゲームの 2 年前、1970 年のワールドカップ決勝も、優勝したペレは観客でもみくちゃにされていた。この頃までのよくある風景である。しかしこのゲームの数か月後、1972 年のミュンヘンオリンピックでは選手村襲撃事件があり、その前後からセキュリティが猛烈に厳しくなっていったのではないだろうか。その意味では、古き良き時代ののんびりした風情を楽しむことができた映像ではあった。ちなみに試合会場はヘイゼルスタジアム。あの「悲劇」の場です（いまは「ボードワン国王スタジアム」と呼ばれている）。

21：30 過ぎ　…　試合終了　＝参加費自己紹介第 2 部
・残る方々の自己紹介＆試合のコメントつき。だいぶ酔いが回っているので、チャチャ入れしながらで面白かった。
・集合写真。そして徳田さん提供の景品（JFA カレンダー）争奪じゃんけん大会。
その後は各自の時間を観ながら…

23：00 ごろ??　…　お開き
時間がよくわからん。私は例によって錦糸町駅前ビルの「楽天地」へ。ほか 2 名とともにサウナ＆温泉を楽しむ。館内レストランでもう少し飲んで、充実の一日が終わった。ああ楽しかった…
2014 年は、サロン 2002 にとって NPO 法人化の記念すべき年であった。いろんなことがあったけど、健やかに成長し続け、あるべき姿にたどり着いたと感じている。
さあ、来年もがんばるぞ～

（ここまで文責：中塚義実）

＜参加者からのコメント＞

（日付はメール配信日）

■安藤裕一（1 月 2 日）

2014 年の NPO 化はサロン 2002 にとって一つの通過点に過ぎないという面もありますが、いろいろなことがチャレンジできる「ポテンシャルに期待」という『ワクワク感』もあります。忘年会ではあまり会話には現れなかったけれども、おそらく参加した人の多くがそのことを感じ共有したのではないでしょうか。2015 年になっても、サロン 2002 とともに自身も前進を続けたいと思います。

■岸卓巨（1 月 3 日）

今回の忘年会は２つの面で記念すべき忘年会でした。１つは、NPO 法人サロン 2002 としてはじめての忘年会であったということ。１０月に法人としての NPO サロン 2002 が誕生してまだ３か月しか経過していませんが、その中でも、経理についてや報告書作成についてなどさまざまな点で「法人」と「任意団体」の違いを感じる機会がありました。2014 年は NPO 法人立ち上げの１年でしたが、2015 年は法人としての基礎を固める１年になればと思います。そして、そのためにも経理や税務の面でアドバイザーが必要という話が法人化プロジェクトの段階から出ていましたが、ついに今回の忘年会でアドバイザーが決定しました。公認会計士の松下徹さんです。ぜひこのことを２つ目の記念すべきこととして忘年会の記録に残していただければと思います

■小池靖（1 月 6 日）

ソ連に出来たことであれば中国にも出来るか、が忘年会に臨む前の仮説でしたが、ビデオが流れるにつれ、脆くも崩れ去りました。3-0 の点差以上に西独との実力差は歴然。ステートアマの強さも W 杯に手が届く水準ではなかった。プーチンが強いロシアを目指してもおそらくサッカーは変えられない。況や中国をや。クーベルタンや嘉納治五郎がスポーツに見出した価値をまだ彼等は“発見”していない、ということなのでしょう。翻って日本。足元の地盤沈下を止められるか、少年団の現場から今年も見つめて行きます。

■大河原誠二（1 月 7 日）

ゲームを支配していた西独にしても、横への選手の動きが少なく、ポジションチェンジがないなぁ。と観ていました。ボールは横にも動く。けど、選手は縦の関係でしか動かない。その代り、サイドでは縦への動きが盛んで、ドンドン追い越していってた印象です。

もしかしたら、ベッケンバウアーが最後尾でどっしり構えてゲームコントロールした事に起因しているのかもしれません。この頃、他の欧州各国の代表はどんなサッカーしていたのか、気になります。

なお、この 20～25 年後、全盛期を過ぎたマテウスが、中盤→最後尾に下がった時も同じようなスタイルになっていたような記憶が。マテウス時代には、サッカー界全体のレベルが上がったためか、いまいちだったなぁ。と、色々懐古しながら楽しく観戦させていただきました。

ありがとうございました。

■金子正彦（1 月 12 日）

まさにお宝映像でした。ソ連チームのユニフォーム「ＣＣＣＰ」、今は勿論見れません。あの頃あんなこと（沖縄返還）、こんなこと（日中国交回復）があったと歴史を思い起こしながら見ました。

クラブチームは続いても、ナショナルチームは変わってしまうんだ、と感慨深いものがありました。

２０１４年は個人的には多難な年でした。仕事は事故続き、サッカー的には贔屓のジェフ千葉が昇格プレーオフ３年連続敗退。前者はともかく、後者は必然の結果ですね。今年こそは優勝して・・・と今更思いつつ、

若者の結婚宣言もあり、楽しい忘年会となりました。ありがとうございました

■牛木素吉郎（1 月 12 日）

１．2014 年のサロン 2002 の活動について

・中塚さんの執念が実って、NPO 法人化を実現したのは、みごとだった。
　途中の経過を見ていたときには、なんために法人化するのか理解しにくかったが、反対意見を無視しないで、議論しながら目的を達成した熱意と努力に感心した。

・NPO 法人としてのサロン 2002 の新しい活動に積極的に参画するのは、年齢的にも無理だと思っているが、法人の活動の一部としての「スポーツ文化を語る会」には、引き続き参加したい。この月例会の開催とその記録の刊行は、きわめて有意義である。

２．映像記録の収集保全と公開について

・サッカーの試合の映像が、いろいろ出回っていて、熱心に収集をしている人がおられるのに驚いた。

・日本サッカー協会では、90 周年記念事業のときに、当時の小倉会長が、サッカー・ミュージアムに「映像収集」を指し示していたが、その後、どうなったのだろうか?

・映像を個人的に集めることには問題はないだろうが、それを公開の場で観覧するときに、著作権、映像権などの問題は、どう処理するのだろうか？

３．1972 年欧州選手権決勝、西ドイツ対ソ連について

・非常に貴重な映像だと思った。(西ドイツ 3 対 0 ソ連)

・この試合について三つのことを考えた。

①東西冷戦時代のサッカーの東西対決。

第 2 次世界大戦後の東西冷戦時代に、スポーツではソ連を中心とする東側の社会主義、全体主義の国が、体操、水泳などでオリンピックの金メダルをとり優勢だった。サッカーでも、ソ連は、1956 年のメルボルン・オリンピックで優勝し、欧州選手権でも 1960 年の第 1 回大会で優勝するなど戦後初期は活躍した。

しかし、サッカーでは、西側のプロ体制が立ち直ると東側は西側に勝てなくなった。1972 年欧州選手権決勝は、その典型だった。

なぜ、サッカーでは、全体主義の東側が勝てなくなったのか？　その原因を、この試合から窺うことができるのではないか？

サッカーで重要なのは、個人の創造力である。

創造力は、型を教え込み、鍛え上げることでは育たない。全体主義国のスポーツ英才教育がサッカーでは成功しなかったのは、そのためだと思う。

②1970 年代の戦法改革

1972 年欧州選手権は「ベッケンバウアーの西ドイツ時代」の始まりだった。

1970 年ワールドカップ・メキシコ大会で「ペレのブラジルの時代」が終わった。

ブラジルは 1956 年スウェーデン・ワールドカップで「現代のシステム」(4-2-4。のちに → 4-3-3→4-4-2) を、ペレとともに、世界に紹介した。それは、個人のすぐれたテクニックと創造力を活かして中盤から組み立てる攻撃的なサッカーだった。

西ドイツは、ベッケンバウアーを、守備ラインの ausputzer（スイーパー=掃除人）として守りの要とするとともに、機に応じて中盤、前線に進出して攻撃に参加させた・

守備ラインのプレーヤーの攻撃参加は、ブラジル黄金時代のサッカーでも見られたものだが、それを組織的に、また意図的に行うようにしたのは、西ドイツだろう。

1972 年欧州選手権の決勝戦は、1960 年代のサッカーから、1970 年代のサッカーへの移行を象徴する試合だった。

③ネッツアーの時代

1974 年のワールドカップ西ドイツ大会のとき、グループ・リーグで東ドイツ対西ドイツの試合があった。西ドイツが苦戦しているとき選手交代があった。交代出場したのはギュンター・ネッツアーだった。スタンドがどよめき、記者席で隣にいた西ドイツの記者が興奮して「カイザー・イズ・カミング」（皇帝が出る）と英語で叫んだ。

そのとき、はじめて、ドイツの国民のネッツアーに対する気持ちに気がついた。

1972 年の欧州選手権で優勝した西ドイツ・チームの中心選手は、中盤で攻めを組み立てたネッツアーだった。だから、ネッツアーは当時、西ドイツ・サッカーの最高のスターだったのである。

その当時、ドイツのサッカーで「カイザー」と呼ばれているのはベッケンバウアーのことだと、ぼくは思い込んでいたが、実はドイツのサポーターにとっては、ネッツアーが「カイザー」だった。

そのカイザー・ネッツアーが、1974 年サールドカップではベンチを暖めていた。2 年前の欧州選手権の思い出が焼きついているサポーターにとっては、これが大きな不満だったのだろう。

ネッツアーを繰り出したにもかかわらす、この 1974 年の東西対決は、東ドイツが 1 対 0 で勝った。

しかし、東ドイツはグループ 1 位になったために、2 次リーグでは有力な優勝候補だったブラジル、オランダと同じ組になり敗退した。

西ドイツは、グループ 2 位になったために、2 次リーグでは、ブラジル、オランダとの対戦を避けることができる結果になり、決勝でオランダに勝って優勝した。
ネッツアーは、その後の試合では出番がなく、ワールドカップでは名を残すことができなかった。
1972 年欧州選手権決勝のビデオは、偉大なプレーヤーだったネッツアーのプレーぶりを知ることができる貴重な映像だった。

④代表チームの監督の役割
サロン 2002 の忘年会で、1972 年欧州選手権の映像を見る前に、主宰者の中塚さんの求めで、ぼくが、ちょっと余計な解説をした。
そのときに参加者から「当時のソ連代表チームの監督は誰ですか」という質問が出た。
この質問には意表を突かれた。
というのは、当時の社会主義国の代表チームの監督について調べようとしたことは、なかったからである。「全体主義体制の中ではサッカーのやり方も型にはまっていて、監督の個性で左右されることはない」という先入観にとらわれていた。
そういうわけで「監督が誰だったか記憶にない。知ろうともしなかった」と正直に答えたが、質問した人は「呆れた」という表情だった。
冷戦時代に東ヨーロッパのスポーツを取材した経験がある。だから、東側の全体主義体制のなかでも、たとえばモスクワのディナモ、スパルタク、ロコモチフのようなクラブ同士で競争があって、それがレベルアップの原動力になっていることは承知していたが、代表チームの監督のことには考えが及んでいなかった。
これは調べてみる価値があると思う。ソ連代表チームの監督は、どのようにして、どういう基準で選ばれたのか？
ご存知の方は、ご教示いただきたい。

■高平豊明（1 月 13 日）
忘年会に参加させていただきました高平と申します。牛木先生が、感想を寄せていただいた中に「映像記録の収集保全と公開について」という項目で取り上げていただき、光栄です。
以前、大学の先生で、スポーツ文化を研究しておられる方に、イギリスでは「ライブラリアン」といって、図書館の司書が各専門分野毎にいて、そういう人の社会的評価が高く、フットボール関連の資料管理の専門家とも話をしたことがある、と聞いたことがあります。
日本では、総じて資料の収集保全に対する関心が低く、そういう取り組みに対する評価も低いので、特定の分野にたまたま熱心な人がいないと、貴重な記録が残らないと励まされました。
今回の牛木先生のコメントも、それと同じ目線で取り上げていただいたと受け止めております。
公開については、ご指摘のとおり、何も手つかずの状態です。著作権、映像権をクリアしている事例として、やっとスポーツバーでのライブ放映などが、手続き的に楽になった程度のようです。それ以外のことに関しては、まだ前例がないと思います。
ただ、スポーツ文化、とりわけサッカー文化の成熟度をあげていくにも、前例のないことを手続き的に制度化して、法的処理ができるようにしたいと思います。皆さんのお知恵もお借りしながら前進したいと思いますので、これからも、よろしくお願いします。
追伸、深夜放送されたＷＯＷＯＷの FIFA バロンドール授賞式を午前中、録画で見ました。賀川浩先生が壇上に招かれてスピーチされ、それを世界のトップクラスの選手たちが、敬意の眼差しで見つめる様子が映し出され、何と誇らしいことか、と感動しました。スピーチ後、万雷の拍手が沸き起こった時、私も録画映像に向かって大きく拍手しました。こういう映像をぜひ、サロンの会合で、また皆さんと一緒に見て、喜びを分かち合いたいものです。